



つばめ農園おひさま便り

38

安溪貴子・安溪遊地

アメリカ在住の李先生とお話

クリスマスに積もった山口市阿東の徳佐高原の二五センチほどの雪は、お正月には溶けて急に暖かくなってきました。このところ、農園主の大慧は、農作業の始まる春に向けて、歩行式の草刈り機のカバーの取り替え等農機具の整備に取り組んでいます。ハウスの中のぶどうの蔓を剪定したり、畑の白菜を少し干して漬物にしたり、豊作だったサツマイモを干し芋にしたりもします。つばめ農園の紹介として、「イセヒカリ物語」というパンフと、この連載の三年分をまとめた冊子も作りました (<http://ankei.jp/yuji/?n=2636>)。

新年には、台湾の新竹出身でアメリカ在住の#李遠川先生ご夫妻と、日本語でインターネット上でお話しするのが、毎年の心躍る習慣になっています。先史学者の國分直一先生とのご縁で知り合ったお二人は、世界的な生化学の研究者で、李先生は、台湾大学のオーケストラや合唱団の育ての親である、農学者の#高坂知武教授の薫陶を受けたピオラ奏者です。奥様の麗子さんは、高坂教授の娘さんでバイオリニストでもあります。これまでに世界のあちこちを旅行された中から、今年は、とくに他とは違って強く印象に残ったという、南米の端のパタゴニアの旅の様子を、美しいスライドで

見せてくださいました。アンデス山脈の南の端が海に落ち込むところ、マゼラン海峡の巨大な氷河の側を船で回る旅は、雄大な自然の中にグアナコやオタリア（パタゴニアアシカ）やコンドルなどの野生動物や、珍しい花々が間近に写し取られていて、コロナの時代になかなか経験できない、大旅行のプレゼントでした。

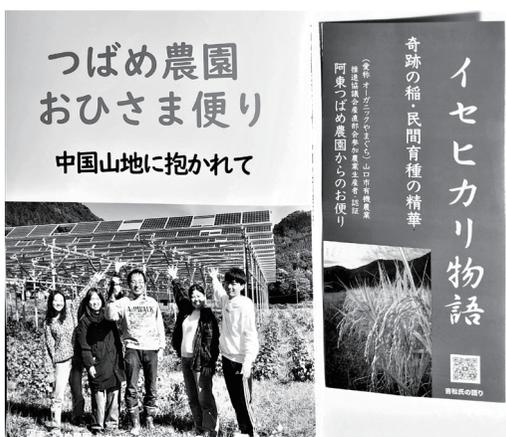
県境を越えた津和野との縁

つばめ農園の有機農業の師匠の#吉松敬祐さんは、冬は翹ぐくりに精を出しておられます。お年始めに、歩いて一五分ほどの吉松農園に家族三人でご挨拶に行きました。地域の地名やそこから北に一山越えれば、もう島根県なので、山口市阿東徳佐と津和野との交流などについて、お話をうかがいました。

それというのも、貴子の母は、子どものころ一九三四年から一九三八年に津和野に住んでいたのです。父親（貴子の祖父）が旧制津和野中学の校長だったので、津和野藩の筆頭庄屋だった彌重郎を借りて、家族七人で暮らしていました。そこは、今は#杜塾美術館として一般公開されています。母とともに、かつて住んだ住宅の二階にあがって見たところ「ここに隠し窓があつて下で奉公人が何をしているかが見えるでし

よう」と母。覗いてみると、下は台所で、石畳に井戸があつて、ここで私の祖母が徳佐瓜のかす漬や、たくあん漬を一年分漬けていたそうです。以下は、吉松敬祐さんの思い出話です。

そうだよ、ここ宇津根集落の人たちもよく津和野に瓜などの野菜を担いで売りに行ったよ。津和野は製紙が盛んだったから、原料のこうぞ・みつまたの苗なんか育てて売りに行つて稼いだ。うちの田んぼの上のため池の横の道があがつて埒をこえたら津和野に出る。この峠に通じる道を「道元道」といいます。曹洞宗の寺がこの道沿いにあるからこう呼ぶのかもしれない。子どもの足でも津和野まで四〇分くらいで行けるから、近いものです。



吉松さんの語り付きの伊セヒカリ物語のパンフ+おひさま便り連載三年分集成の冊子

昔は今と違って、津和野城の宇津根に近い鷺原八幡宮や、今は道の駅がある側が町の中心だったから、今よりも町なかには近かった。津和野は、こころ周辺の商業の中心地で、鍛冶屋の作る道具や生活用品、ものづくりの資材など、みなここで買っていた。太鼓谷のお稲成様の祭の縁日にも出かけたよ。

津和野で売った帰りには、津和野の下肥しもとえを入れた「肥たご」を二つ、天秤棒てんひんぼうで担いで埒を越えて戻ってくる。津和野は町だったから、食べ物がいい。こころへんの人はあまり魚など食べていないから、「津和野の肥やしをかけると野菜がようでできる」と、うちの昔の婆さんも言っていた。金肥きんひが出まわる戦後までは、肥料といったら家畜の糞か下肥だったから、津和野との関係は大したものだったよ。肥たごひとつが一斗いっとう(八リットル)ほどだから、天秤棒一本で四〇キ口近く担いだ。行くときには、洗った桶の中に売りたいもの、瓜とか大根とかを入れていったわけだ。帰りに山道を歩くときは、背が低いと桶がつかえて苦労した。揺れてもこぼれないように、上には草を浮かべるんだ。

炭俵は一つが四貫目(約一五キログラム)あるから三俵を積んで四五キ口、このぐらいは、子どもでも背中(せなか)に担いで出したもんよ。大人なら六〇から九〇キ口は担いだ。

子どもが津和野への運搬を手伝うときは、父親は朝早く、まず子どもの分の荷物を担いで埒まで持っていって置いて、戻ってからこんどは子どもと一緒に自分の荷物を担いで埒まで上り、そこから子どもにも荷物を担がせて津和野に降りていった。

うちもそうだけど、この人々は島根県に親戚が多い。津和野からさらに北側の、益田市の南の方まで、鉄道が通る前から、一日で歩ける十里(約四〇キロメートル)の範囲から嫁や婿をもらうなどの行き来がある。

津和野は近いし、津和野からさらに日本海側の田万川たまがわ(現、萩市)までの道がよくて、そもそもこのあたりの人が「海」と言ったら田万川の江崎漁港を指したものだ。おだやかない漁港で、魚もここから来ていた。大正時代のはじめに山口線が開通してからは、それまでは主に津和野を中心にしていた流通の経路が随分変わった。

(つづく)
(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはブログ内検索用です。



a@ankei.jp

http://ankei.jp